

データヘルスサイエンス入門プログラム 自己点検評価結果について

1. プログラムの概要：別紙（実施計画）のとおり
2. プログラム開始年度（評価対象）：令和3年度入学生以降（令和3年度）
3. 評価組織：教育の質向上委員会
4. 評価日：令和4年5月6日（金）
5. 評価基準

S：非常に優れた点があり、プログラムの趣旨を達成している。

A：優れた点があり、プログラムの趣旨を概ね達成している。

B：プログラムの趣旨を概ね達成しているが、更なる改善が望ましい。

C：プログラムの趣旨を達成するために、改善が必要である。

－：現段階では評価対象外

自己点検・ 評価の視点	取組状況等	評価結果
プログラムの 履修・修得状 況	<p>本学は看護の単科大学であり、また本プログラムの修了要件は全て必修科目としていることから、原則として修了要件としている科目の履修率は100%となる。</p> <p>本プログラムは令和3年度開始であり、令和3年度開講科目は1年次開講必修科目の「情報リテラシー（プログラム修了要件）」及び選択科目「情報機器の操作（プログラム修了要件外）」の2科目である。情報リテラシーに関しては、必修科目であることから1年次在学学生110名全員が履修・修得した。選択科目である「情報機器の操作」に関しても95%以上が履修し高い履修率となった。</p> <p>引き続き、新年度ガイダンスや関連授業科目内での履修推奨を行うことで、高い水準での選択履修を目指す。</p>	S
学修成果	<p>各科目の単位認定試験において、学修目標が到達できたかを評価するとともに、プログラム全体における評価として、全プログラム修了後に「データ・AIの利活用と看護師の役割」について考察させたレポートを提出させることによって、数理・データサイエンス・AIに対する思考に関する学修成果を測っている。また、「プログラムに対する評価」を実施し、科目履修前および履修期間終了直後に、知識、スキル、態度の視点から理解度や到達度の質問に回答してもらい、集計、分析を行っている。</p> <p>分析の結果、プログラム実施後にはいずれの項目も統計学的に有意に上昇し（$p < .001$）、プログラムの成果はあったと判断できた。</p>	A

<p>学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度</p>	<p>各科目は授業終了後に学生による「授業評価」を行っており、プログラムを構成する科目については、科目ごとに経年比較することで、プログラム全体の内容改善に向けて検討を行うものとする。本プログラム初年次に実施した2科目「情報機器の操作」および「情報リテラシー」について、プログラム構成前の令和2年度との授業評価を比較すると、理解度に関する評価項目である「講義はわかるように構成されていたか」、「今回の講義であなたの知識が増えたか」、「本講義に対する総合評価はどうか」を合算した平均値は、令和2年度が4.13であったのに対して、令和3年度の評価平均は4.44となっており、統計学的に有意に上昇した($p<.001$)。従来科目にモデルカリキュラムに沿った内容を盛り込み、プログラムに位置付けたことによって、理解度が高まっていることが分かる。今後も経年比較で理解度を確認しながら、授業改善を行う。</p>	<p>A</p>
<p>学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度</p>	<p>プログラムが進行中のため現時点では行えていないが、令和4年には、プログラム修了後のアンケートに後輩学生に向けた推奨度を確認する欄を設け、その内容を次年度に学内で周知することで、選択科目の履修を促すものとする。</p>	<p>—</p>
<p>全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況</p>	<p>本学は看護学部看護学科の単科大学であり、更にプログラム構成科目5科目中、3科目が必修科目であることから、全学的な履修を可能としている。プログラム内には、さらに学修を深めたい学生のニーズに対応するため修了要件外の選択科目も設定しており、その履修率を高めるため教務課からのガイダンス等で推奨を行っている。更に、学部における入門プログラムで興味関心をもった学生が本学大学院へ進学し、データヘルスサイエンス領域で実践力を高める学びを目指せるよう、段階的な教育展開を計画している。</p>	<p>A</p>
<p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p>	<p>プログラム進行中のため、現時点では修了者の評価は行えていないが、プログラム修了者の卒業後の調査を実施し、その活躍状況を評価するものとする。その際、卒業生の就職先である医療機関へヒアリングを行い、教授内容についての検討を行う予定である。</p>	<p>—</p>

<p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>医療機関から数理・データサイエンス・AI教育プログラムの必要性と期待する内容についてヒアリングを行い、得られた内容を授業内容に反映させることとしている。令和3年に受けた外部評価では、医療機関に蓄積されているデータの2次利用として、学生がそれを分析し、臨床現場にフィードバックできるようなシステムを将来的に構築できることが望ましいという意見があった。個人情報保護の観点から、実データの利用にはハードルもあるが、グループ医療機関と連携してシステム構築を検討したい。</p>	<p>B</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>社会でデータやAIが活用されている事例を多く示し、特に医療現場という身近な場で実装されている様々な例を概観することで、これからの価値の創造に関わるための素地を養うことに意欲が持てる内容としている。また、実データを扱い、探索的に課題を見つけたり、仮説を立て、検証のための分析を行ったりするデータ分析演習を取り入れている。それによって、データの扱いに慣れ、リテラシーを高め、学ぶ楽しさが感じられるようにしている。</p>	<p>A</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p>	<p>AIの利活用など、専門的に馴染みのない用語については、身近な事例を多く取り入れ、社会の中で既に多くの恩恵を受けていることを実感させることで分かりやすさにつなげている。単に知識を広げるだけでなく、パソコン演習を通して実際にデータを分析させ、その中で統計学の知識の意味が理解できる授業構成としている。</p>	<p>A</p>